

Today's Mission & 徒然なるままに...

少し前に、作問法についてふれたことがありました。自分で問題を作成し、自分で解く（相手に解いてもらう）方法です。自分で問題を作ることができ、解答することができるということは、その分野を理解していることの確認にもなります。また、相手に解いてもらって何か訂正事項を発見した場合は、理解の修正をすることも可能です。作問法は、学習において有効な手段の1つであることは、HR などでも機会があるごとに伝えたいと思います。

①さて、私は、中学生のころからこの作問法を実践していました（少し変わり者？）。友人にも、実践していた人が数名いて、交換しては解き合ったりしていました。中学校の時は、基礎基本の問題中心。高校生の後半にもなると、質もあがってきて、作り甲斐もあり、解き甲斐もあったのを今でも覚えています（校内の実力考査や、最難関大学にあわせて予想をし合ったり…）。

高校生だった当時、ボランティアで近所の中学生に高校受験の指導をすることもあって、高校入試の模擬試験を作ったりもしていました。高校生活や受験勉強の傍らボランティア指導、という一見風変わりな生活をしていたような気がします（汗）。

中学生のころから大学院生のときまでに作ってきたものが、今でも残っているのですが、振り返ってみると、いろいろな変化があったことに気がつきました。

中学生の時は、鉛筆、ものさし、ルーズリーフで、手書きで作成していました。このころは、“それっぽいものを作る”という感覚でした。手元にはパソコンもなかったので、解答用紙を作るのも、ものさしできれいに線を引いて…という感じでした。“懐かしい…”まさにこの一言。字も幼く、設問もほぼ一問一答形式が多かったですね。

②高校生になると、パソコンを使うようになりましたので、試験はパソコンで作成するようになりしました。高校生の最初の段階は、“パソコンを使った上で、それっぽいものを作る”という感覚。中学生の時のように、“形式上の見栄え”が優先していました。

各教科の作成を通して、数学の数式の挿入の仕方、解答用紙の作り方、漢文の訓点のつけかた、ルビの振り方、下線部・傍線部の引き方、セルの調整、… ③さまざまなことを、実践を通して学びました。今でも、この時の経験は大きかったと思います。

さて、高校1年生の2学期頃から、変化が起きました。

“〇〇先生だったらどういうところを問題にするだろう？”“前の考査の出題の仕方から、こういう傾向があるのではないだろうか？”

今度は、“質”にこだわるようになりしました。出題者の立場になったつもりで、問題を作成する。すると、自然に授業の見方も変わってきました。④生半可なことでは、出題者の立場で考えることはできません。集中力も、かなり増したことを覚えています。

最初は、小テストや定期考査の予想問題を作成していました。定期考査の難易度も高めの学校だったので、予想するのも一筋縄ではいきませんでした。経験を増むうちに的中率も上がるようになりしました。“作成者の意図やメッセージを受け止め、解答を通して自分の答えを返す”… 試験も奥が深いなあと、このころ感じたのでした。

高校生の後半になってくると、今度は実力考査や大学入試へと対象が移っていききました。具体的な範囲も指定されない試験なので、出題者の立場で問題を作成するのが非常に難しく感じられました。題材、出典、難易度、出題傾向、etc … 1つ1つに注意を払いながら、作成に取り組んでいました。

ここで、新たに1つの意識の変化が訪れました。それは“出題の文言”に着目したときのことです。国語の試験を作成していた時のこと。

“簡潔に説明せよ”“本文中の語句を用いて説明せよ”“わかりやすく説明せよ”“具体的に説明せよ”

“本文全体を踏まえて／本文の論旨を踏まえて説明せよ”

出題者は、どのような意図をもって、出題の文言を使い分けているのだろうか、と考えるようになりしました。

～vol.14 へ続く～

（皆さんは、出題の文言の使い分けについて、どう考えますか？）

[35 回生投稿窓口・35 回生質問受付窓口](#) takatsuka2019@gmail.com

（件名に、学年、組、番号、名前、用件を必ず書いて送信。：気の向くままに vol.0 参照）
（投稿・質問以外のメールは固くお断りします。休校期間が終了次第、本メールは閉鎖します）

気の向くままに… ～英語で表現コーナー～ vol.14 へ続く 編集 35 回生学年団 3-1 K.M

